

日本人学部生によるインタビュー会話の比較分析

ー印象評価・会話データ分析・フォローアップインタビューをもとにー

中井陽子(東京外国語大学)

1. はじめに

学部・大学院でアカデミックな活動を行うには、聞き手として有識者から情報を得るインタビューが適切に行えることが重要である。だが、日本人学部生がインタビューを行い、聞き手としてどのように話題を展開させ、情報を聞き出しているか、会話データにおける言語・非言語行動や会話参加者の意識をもとに詳しく分析したものは少ない。また、どのようなインタビューが良いのか、第三者からの印象評価をもとにした研究も少ない。そこで本研究では、日本人学部生による2つのインタビュー会話について、印象評価、会話データにおける言語・非言語行動、および、フォローアップインタビューでの会話参加者の意識の点から比較分析し、インタビューを行う際のより良い聞き手の技能とは何か明らかにする。

2. インタビュー会話の先行研究

大塚(2005)は、インタビュー番組の司会者がゲストの話に対して、あいづち、繰り返し、言い換え、情報提供、質問などを用いて、番組の進行を円滑に行おうとしていたとしている。小林(2010)は、インタビュー番組でホストがゲストの回答に対して、見解表明(例: ~と思うんですけども、)などを用いてゲストの情報をまとめ、ゲストが回答しやすくしてから質問していたとしている。また、田中(2011)は、インタビューの質問者が用いる「つなぎ表現」として、「指示表現」「意味的関連」「接続詞」「論理的帰結」「引用」が観察されたとしている。加藤(2002)は、日本語授業で学習者が母語話者にインタビューを行った際に母語話者が意識化した規範として、聞き手は十分な準備が必要だ、テーマは適切なものであるべきだ、聞き手が話を膨らませるべきだといったものを挙げている。

中井(2018)は、2017年度に会話データ分析を学ぶ学部授業の中で、受講生がワークシートに記入したものをもとに、受講生が持つより良いインタビュー会話の方法についての規範を分析した。その結果、「事前準備」、「相手への配慮」、「質問の仕方」、「相手の応対の仕方」についての規範が意識化されていたことが分かった。さらに、本授業において、本研究で分析するインタビュー会話Aのビデオを受講生に見せ、聞き手の優れた点を記述させた結果、「内容」(ほめ、質問の順番、質問の明確さ、話の広げ方・深め方)、「聞き手の反応の仕方」(あいづち、繰り返し、まとめ、感想、丁寧な話し方、笑い)、「非言語行動」(うなずき、目線、笑顔、笑い、ジェスチャー、前傾姿勢)、「話の繋げ方・まとめ方」(自分の解釈を含めたまとめ、質問と質問の繋げ方)、「相互行為」(息が合っている、協力的な態度)などについての記述が見られた。

3. 研究方法

3.1 インタビュー会話の収集

インタビュー会話収集に当たって、学部・大学院生にとって身近な部活動(剣道部、少林寺拳法部)の内容について、部長経験のある者に聞く会話をデータとすることとした。インタビューの聞き手は、武道の経験がある演劇部の日本人学部生に依頼した。収集したインタビュー会話は、2件である。インタビュー会話Aでは、聞き手Aが剣道部元部長に部活について聞いた。インタビュー会話Bでは、聞き手Bが少林寺拳法部部長に同内容を聞いた。質問内容は、各話し手、聞き手に予め指定しておき、事前に話す内容を考えてきてもらうようにした。質問内容は、(1) どうして部活に入ったか、(2) 部活に入って良かったこと・成長できたこと、(3) 部活で大変なこと、(4) 部活を通して日本の武道の精神をどのように感じ、身に付けたか、(5) 部活の経験が将来どのように活かせるかであった。表1は、参加者の背景である。

表1 インタビュー会話A, Bの参加者の背景

所要時間	参加者	所属・身分・性別	大学学年	経験	話し手と聞き手の関係
インタビュー会話A (12分09秒)	話し手W	剣道部元部長・男性	5年生	大学1年生の時に剣道を始める	聞き手Aが大学1年次に剣道部の体験稽古に参加し、話し手Wと面識があった
	聞き手A	演劇部部員・男性	4年生	子供の時に剣道経験あり	
インタビュー会話B (17分05秒)	話し手M	少林寺拳法部部長・男性	3年生	高校生の時から少林寺拳法の経験あり	初対面同士
	聞き手B	演劇部部員・男性	4年生	子供の時に空手経験あり	

各インタビュー会話の終了後の2週間以内に、会話ビデオを見ながら、各参加者に会話時の意識について個別に聞くフォローアップインタビュー（FUI）を2時間程度行った。FUIでは、会話時に考えていたこと、発話の意図、違和感を持った・面白いと思った瞬間とその理由、沈黙・笑いの理由などを聞いた。なお、会話ビデオとFUIは、全て文字化した。

3.2 印象評価の調査手順

インタビュー会話A、Bに対して、2018年8月～11月に日本人大学院生5名（日本語教育経験者）を対象に印象評価の調査を行った。各5名に対し、インタビュー会話A、Bの会話ビデオと印象評価シートを配布し、ビデオ動画を数回見ながら、印象評価シートにある各評価項目に回答してもらった。回答時間は、それぞれ1時間半～2時間程度であった。

評価項目は、表2のように設定し、それぞれ「5非常に良い」「4良い」「3普通」「2あまりよくない」「1悪い」の5段階の評価、および、その理由を述べる「評価コメント」を記入する欄を設けた。この評価項目は、インタビュー会話に関する先行研究（2節）における、聞き手の言語・非言語行動の技能、インタビュー会話の規範を特に参考にして設定した。

表2 印象評価シートの評価項目

(1) インタビューの参加態度・丁寧さ	言葉遣い、非言語行動、音調など
(2) 質問内容	明瞭さ、話の引き出し方、掘り下げなど
(3) 聞き手の反応の仕方	あいづち、繰り返し、言い換え、確認、意見・感想コメント、ほめなど
(4) 話題の繋げ方・展開のさせ方	まとめ、前置き、接続表現、話題の繋がり・膨らませ方、質問の順番など
(5) 非言語行動	目線、うなずき、笑い、ジェスチャー、姿勢など
(6) 事前準備	下調べ、質問項目の確認など
(7) 話し手と聞き手の相互行為・協力体制	息が合っている、協力的な態度、連帯感など

4. インタビュー会話の印象評価とインタビュー会話の分析

インタビュー会話A、Bの印象評価の得点集計（4.1）、および、「評価コメント」、会話データ、FUIの分析を行う（4.2）。

4.1 印象評価の得点の集計結果

印象評価の5段階の得点を分析した結果、表3のように、総合平均点がインタビュー会話A（4.51）の方がインタビュー会話B（2.37）より高かった。また、(1)～(7)の各項目の平均点も、インタビュー会話Aが4.2～4.6、インタビュー会話Bが1.8～3.6と、全てインタビュー会話Aの方がインタビュー会話Bより得点が高かった。

表3 インタビュー会話A、Bに対する印象評価の得点集計（大学院生5人分）

評価項目	評価者1		評価者2		評価者3		評価者4		評価者5		平均点	
インタビュー会話A/B（聞き手A/B）	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
(1) インタビューの参加態度・丁寧さ	5	3	4	4	5	3	4	4	4	4	4.4	3.6
(2) 質問内容	5	1	4	2	5	2	5	2	4	2	4.6	1.8
(3) 聞き手の反応の仕方	5	1	3	2	5	3	5	2	5	3	4.6	2.2
(4) 話題の繋げ方・展開のさせ方	5	1	4	2	5	2	5	2	4	2	4.6	1.8
(5) 非言語行動	5	1	3	3	4	2	4	2	5	3	4.2	2.2
(6) 事前準備	5	2	4	2	4	3	5	3	5	2	4.6	2.4
(7) 話し手と聞き手の相互行為・協力体制	5	2	4	2	5	2	4	3	5	4	4.6	2.6
平均	5	1.6	3.71	2.4	4.57	2.6	4.71	2.4	4.57	2.9	4.51	2.37

4.2 評価コメント・会話データ・FUIの分析

表4は、インタビュー会話AとBの平均点の差が大きい評価項目(2)、(4)の「評価コメント」の記述の抜粋に、+評価、－評価、＋－評価の区別を付けてまとめたものである。

表4 評価項目の平均点と「評価コメント」の抜粋

評価項目	平均点	インタビュー会話A	平均点	インタビュー会話B
(2) 質問内容	4.6	+適度な自己開示やあいづちで、話を引き出している。 +自分の経験を語った後、発展させる質問をしている。 +相手の答えを繋げるような質問ができていた。 +話し手が言った内容を掘り下げる質問をしている。 +質問が簡潔で分かりやすい。	1.8	－質問の内容がはっきりしない。 －抽象的で難しい質問が続いて、話し手が答えにくそう。 －前置きが長すぎて、質問文がはっきり言えていない。 －言い直したりして質問内容が分かりづらくなっている。 －単純な質問が多く、話題が深まらない。
(4) 話題の繋げ方・展開のさせ方	4.6	+まとめのコメントをしてから「なるほど」と言うことで、その話題が終わりであることを示している。 +質問の前・前置きを入れていて、流れを作っている。 +前の話題を次の質問につなげている	1.8	－質問項目がまとまらず考えている。 －話題が変わるたびにぶつっと切れてしまう。 ＋－話し手の話を受けて、まとめを入れようという意識は感じられるが、コメントが思いつかず、間が空いてしまっている。

ここから分かるように、インタビュー会話Aでは、あいづち、コメント、まとめで話題を終了させ、自分の経験を語る自己開示や前置きなどを用いて、前の話題と次の話題を繋げながら簡潔に質問し、話題を発展させているという評価がされている。一方、インタビュー会話Bでは、前の話題のまとめを入れようとする意識はあるものの、うまくまとめられない上、次の質問の前置きが長く、話題の繋がりが見えにくく抽象的な質問をしてしまっているという評価がされている。以下、これらの点が特徴的に現れている会話例の一部とFUIで語られた会話参加者の意識をもとに詳細に分析する。

4.2.1 インタビュー会話A

会話例(1)では、148A、150Aで聞き手Aが剣道経験があることを伝え、152A、154Aで前置きとして話し手Wの話を引用しつつ、武道の精神について質問を投げかけている。この後、155Wから話し手Wが武道の精神の影響を語り始める。FUIで話し手Aは、「自分の話をしてしまったが、次の話題に行かなくてはならないという意識もあって話を展開させた」と述べていた。一方、話し手Wは、相手が次の流れに移るようにスムーズにリードしてくれるので、それを汲み取って、149Wでうなずいたという。また、165Wの話し手Wの「礼に始まり礼に終わる」に対し、聞き手Aは剣道をしていた頃に常に言われていた経験があり、166Aで「んー。」と深くうなずいたという。その後、167Wで話し手Wは、さらに武道の精神論を展開させていった。この部分は、評価者が指摘する「適度な自己開示やあいづちで話を引き出している」例だと言える。

会話例(1)インタビュー会話A

148A:で僕はー、結構中学校の時、剣道やってたりしてー、	自分の経験・自己開示
149W:うんうん。	
150A:そういうまあ僕もー、一応武道にちょっと興味があつてー、そういうことやってたんですけどー、	自分の経験・自己開示・指示表現
151W:うん。	
152A:その精神面に興味があるっておっしゃっててー、空手と剣道の二つをやる中でー、その武道の精神みたいなの、	引用・前置き
153W:んー//んーんー。	
154A:ものってー、このー、大学5年間通して何か、浮かんできたものってありますか。	質問表現
155W:武道の精神か、やっぱり一番影響受けたのは、そのさっき、言った警視庁の、	
156A:うん。	あいづち
157W:先生をされていた方から//のー、	
158A:そうですね	あいづち
159W:言葉なんですけどー、んー、っと、まあ和っていうのをすごい、尊ぶっていう、	
(中略)	
165W:まああとー、礼に始まり礼に終わる//みたいなの、ところであったりとかはー、	
166A:んー。{深くうなずく}	あいづち
167W:何かすごい、やっぱ重要だなと思ってー。個人的な見解なんですけど、何かスポーツ、終わった後にガッツポーズでこうワッてこう、	

会話例(2)では、237Aで聞き手Aが中学の頃の剣道の稽古を思い出してきたと述べ、「追い込み」稽古という専門的な用語を出して、話題を展開させようとしている。これを受け、238Wで話し手Wが寒い冬の時期に稽古をするという話に展開させる。FUIで話し手Wは、聞き手Aが「思い出してきた」と述べたため、もう少しこの話題で盛り上がりたと思い、238Wで話を展開させたと述べていた。さらに、247Aで聞き手Aが「やっぱ寒い時期ならではの稽古とかありますか。」と話題を掘り下げようとする。この質問は単文の疑問形であり、話し手も248Wですぐに回答をしている。FUIで聞き手Aは、「寒稽古があるというのは経験から分かっていたので、エピソードがあれば聞きたいな」と思って、247Aで聞いたという。この会話の部分は、評価者が指摘する「自分の経験を語った後、発展させる質問をしている」「相手の答えを繋げるような質問ができていた」「話し手が言った内容を掘り下げる質問をしている」「質問が簡潔でわかりやすい」例だと言える。

会話例(2)インタビュー会話A

237A:あ僕も何か思い出してきました。追い込みってありました//ね、中学校の時。長い方で、あー//懐かしい。	自分の経験・自己開示
238W:追い込み。	それを、冬の時期にやらせるんですよ。
239A:{笑う}	
(中略)	
247A:やっぱ寒い時期ならではの稽古とかありますか。	質問表現
248W:まあー、ま武道ー、全般で言うとなんか寒稽古っていう、	

なお、聞き手Aと話し手Wは多少面識があり、安心して話せたという点もインタビュー会話Aが円滑に進んだ要因であると言える。実際、FUIで話し手Wは、聞き手Aと剣道部の体験稽古で会ったことがあり、リラックスして普段の日常会話のように話せたと述べていた。また、互いに剣道経験者で共有知識があつて楽に話せた上に、聞き手Aが話に乗りつつうまく話を振って進めてくれたおかげで滞りなく会話を進めることができたとも述べていた。

4.2.2 インタビュー会話B

会話例(3)では、聞き手Bは、158B～168Bで、少林寺拳法部で苦労を感じることもあるか質問をしている。この質問の部分は、「あるいは」を用いた言い換え、「なんか」「なんだろう」などのフィラー、「～思うんですけども」を用いた見解表明の前置き、「例えば」を用いた例示が用いられ、長くなっている。だが、164Bと168Bの質問表現は、「ありますか」という単純な確認質問(Yes-no question)になっている。また、前置きと質問の際、手元のメモに視線を落とすこともあった。この部分について、FUIで聞き手Bは、162B、164B、166Bで用いた「苦しみ」という語彙では暗く辛いイメージだけになってしまうため、168Bで「苦労」という語彙に言い換えたと述べていた。また、この部分で言い換えが多く冗長なのは、自分が言いたいことのよりの確かなイメージを相手に伝えようとしたためであったという。一方、FUIで話し手Mは、この質問に対して元々答えを用意できていなかったため、169Mで顎に手を当てて、考えていたという。このような聞き手Bの質問の仕方に対して、評価者は、「質問の内容がはっきりしない」「前置きが長すぎて、質問文がはっきり言えて

いない」「質問項目がまとまらず考えている」「抽象的で難しい質問が続いて、話し手が答えにくそう」と評価していた。

会話例(3) インタビュー会話B

158B: {手元を見る}でもやっぱりそういう風にして価値観をなんか、せつしよ、価値観の折衝だったとかー、	前置き・指示表現
159M: {うなづく}うん。	
160B: あるいはその、いろんな人と、その活動を共にしていく中でー、そのー、{手元を見る}なんだろう、やはりぶつかり合いとかも、あると思うんですけどー、	前置き・言い換え・フィラー
161M: {うなづく}うん。	
162B: やはりそういうそのなんだろう、例えば部活であるが故の苦しみとかー、	質問表現・指示表現・フィラー・例示
163M: {うなづく}うん。	
164B: あるいはいろんな考えを持つ方々と一緒にやるが故の苦しみとかっていうのは//ありますか、	質問表現・言い換え
165M: {うなづく}うん。	
166B: あるいはそれともかん、そう、そうで、そうでない苦しみとかってのももちろんあると思うんですけど、少林寺拳法部、{息を吸う}に入ってるーやはり感じられる何か、{下を向き首をかしげる}苦しみというか、	前置き・言いよどみ 質問表現・言い換え
167M: {うなづく}うんうん。	
168B: {相手の方看向く}苦労とか、そういうものってありますか、	質問表現・言い換え
169M: {顎を触る}そうですねー、うーん、やっぱりー、僕はー、結構長くやってるものですからー、後輩に教えるってことがよくあるんですよ。	

このように、インタビュー会話Bでは、聞き手Bが次の話題展開に迷いがあり、前置きに言い換えやフィラーが多くなり、前の話題と繋げながら簡潔に質問をすることが困難であったことが分かる。実際に、FUIで聞き手Bは、相手の話を咀嚼して次の質問をすることに意識が集中したため、話題のまとめが無理矢理で質問が冗長かつ唐突になってしまったと述べていた。特に、相手の話の着地点が自分の予測と違う場合、次の質問への移り方に迷ってしまったという。そして、頭の中でぼんやりとした概念をまとめながら話すいつもの癖が出てしまったという。ただし、聞き手Bは、相手の話を聞くことはうまく行ったと感じたという。そして、次から次へ質問を移すと冷たく一方的になるため、双方向の話の中で話題を繋げるように話したという。実際に、FUIで話し手Mも、一つの話が終わったら聞き手Bがまとめてくれたため、次の質問に話に移っていくことが分かり、回答しやすかったと述べていた。また、話し手Mは、聞き手Bに対して、話のリズムやスピード、あいづちの頻度などが自分の感覚に近く、親近感がわいたとともに、会話も基本的に途切れず、何度か互いに笑い合えて、楽しくインタビューに応じることができたという。ここから、第三者による会話の印象評価や会話例に見られる言語・非言語行動の特徴だけでは窺い知れない当事者間の感じ方は、また異なったものであるとも言えよう。

5. まとめ

以上、インタビュー会話A、Bについて、印象評価、会話データにおける言語・非言語行動、FUIでの会話参加者の意識の点から比較分析し、インタビューを行う際のより良い聞き手の技能とは何かを探った。その結果、多少面識があり共有知識もあるインタビュー会話Aでは、話題をまとめ、自分の経験を語る前置きなどを用いて、前後の話題を繋げつつ簡潔に質問し、話題を発展させるなどの特徴が見られ、印象評価の得点が高いことが分かった。一方、話題を的確にまとめられず、次の質問の前置きが長くなり、前の話題とうまく繋がれずに抽象的な質問をしてしまっていたインタビューBは、印象評価の得点が低かった。ただし、会話参加当事者の話し手は親近感を持って話せていたということも分かった。

以上のようなインタビュー会話の聞き手の技能について、学部・大学院生のアカデミックな活動の指導に取り入れていくことが必要だと考える。また、今回分析し切れなかった参加態度・丁寧さ、聞き手の反応の仕方、非言語行動、事前準備、話し手と聞き手の相互行為・協力体制などの評価項目の面からも詳細な分析を行い、インタビュー会話に必要な聞き手の技能についてより多角的な面から明らかにしたい。

謝辞 本研究は、平成 28～30 年度科学研究費（基盤研究(C)）「会話データ分析の手法を用いたインターアクション能力育成のための教材開発」（研究代表者：中井陽子）(16K02800) の成果の一部である。研究協力者の方々に感謝する。

参考文献

- 大塚容子 (2005). テレビインタビュー番組におけるあいづち的表現—ボライトネスの観点から— 岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編, **44**, 55-69.
- 加藤好崇 (2002). インタビュー接触場面における「規範」の研究 東海大学紀要 留学生教育センター, **22**, 21-40.
- 小林友美 (2010). テレビのインタビューの談話における「話段」の展開 国語研究, **73**, 34-46.
- 田中妙子 (2011). インタビューにおける質問の展開方法—「つなぎ表現」を焦点として— 日本語と日本語教育, **39**, 37-48.
- 中井陽子 (2018). インタビュー会話の分析活動から学ぶより良いインタビューの方法—会話データ分析の手法を学ぶ学部授業での実践をもとに— アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル, **10**, 36-44.